昭和薬科大学紀要
Vol.55；15-22，2021

原 著

読解力は「書く」ことで向上するか

Can Writing Improve Reading Skills?

井上能博[1]、片岡雅知[2]、浅見紫織[2]、石井悠紀子[2,3]、柴崎文子[2,3]、廣戸健悟[2]、則近千尋[2]、唐音啓[2]、松本一樹[2]、吉永真理[4]、鈴木英明[5]
INOUE Yoshihiro[1], KATAOKA Masanori[2], ASAMI Shiori[2], ISHII Yukiko[2,3], SHIBASAKI Ayako[2,3], HIROTO Kengo[2], NORICHIKA Chihiro[2], TANG Yinqi[2], MATSUMOTO Kazuki[2], YOSHINAGA Mari[4], SUZIKI Hideaki[5]

昭和薬科大学　統合薬学教育研究室[1]、昭和薬科大学　非常勤講師[2]、東京大学　大学院教育学研究科[3]、昭和薬科大学　臨床心理学研究室[4]、昭和薬科大学　英語文化研究室[5]
Laboratory of Pharmaceutical Sciences and Education, Showa Pharmaceutical University[1]; Part-time lecturer, Showa Pharmaceutical University[2]; The University of Tokyo, Graduate School of Education[3]; Laboratory of Clinical Community Psychology, Showa Pharmaceutical University[4], Laboratory of British Cultural Studies, Showa Pharmaceutical University[5]

キーワード：読解力、小論文作成、フィードバック
Reading skills, essay writing, feedback

要　旨

自学自修を行う上で重要な能力である読解力が、前期科目内で行った文章を書くトレーニングで向上した。これを可能にしたのは、文章の構成の「型」をはじめに示したこと、および毎回のフィードバックに依る所が大きいと思われる。しかし、読解力を定着させるには継続的なトレーニングが必要である。

序　論

大学生の学力が低下しているとの報告があり[1, 2)]、著者らも実感している。その理由について様々な報告がなされているが、その中に読解力の低下がある。読解力とは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力と定義されることがある[3)]。この読解力が低いことにより、教科書を読んでも理解できない、問題演習後に模範解答をみても自分の出した答えが合っているのか判断が十分に出来ない、すなわち自学自修ができない事態に陥ってしまう。その結果が、学力低下につながっていると考えられている。

読解力が低下した理由として、読書量の減少[4]、異世代と話す機会の減少による語彙数の減少、SNS などによる単文コミュニケーションの増大等が指摘されている。これらの指摘にたてば、文章を読む量を増やせば読解力が向上する可能性があることになる。しかし、非常に長い時間がかかることが予想される。そこで、効果的な読解力向上の方法として、「読む」作業ではなく、難易度の高い「書く」作業を行うことで、より効果的に読解力が向上するのではないかという仮説を立てた。本学１年前期に〈アカデミックスキルズ入門〉という科目が設定されており、大学で学ぶために必要な科学的知識との関わり方、アカデミック（学術的）な文章の読み書き作法などを演習を通して学ぶ。この講義の前後で読解力がどのように変化するかを観察したので報告する。

【方法】

１　講義内での書く作業

科目名：アカデミックスキルズ入門

受講者：　2019年度　１年次学生　241名

演習の概略：レポートを作成するときに気をつけること（表１）について説明を受ける。
（文章の型が提示される）
評価基準としてルーブリック評価表が示される。（表２）
8000～10000字の長さの文章が提示される。
講義時間内に表１に示された形式に従い、レポートを作成する。
提出されたレポートは個別に添削され、各個人に返却される。
添削した教員によって全体の講評が受講者に示される。
一人の学生は、４つの異なる文章に対してレポートを作成する。

課題とした文章

課題１：人工知能と経済の未来―2030年雇用大崩壊―、井上智洋（文春新書）、pp.26-43、(2016)

課題２：正しく考えるために、岩崎武雄（講談社現代新書）、(1972)

課題３：人工知能と経済の未来―2030年雇用大崩壊―、井上智洋（文春新書）、pp.26-43、(2016)

課題４：知ろうとすること。、早野龍五、糸井重里、(新潮文庫)、155-168 (2014)

２　読解力測定

大学入試センターのセンター試験問題を用いて測定した。難易度をそろえるため、当時の全国平均点がほぼ同じであった 2008 年と 2012 年のものを選択し、それぞれ上記演習が始まる前と終了後に実施した。

【結果と考察】

アカデミックスキルズ入門の講義の前後で読解力がどのように変化したかを、大学入試センターの国語（現代文）の試験問題（50 点満点）を用いて検討した。各試験の得点分布をヒストグラムにまとめた。（図１）アカデミックスキルズ入門の講義受講の前

後で比較したところ、平均点は22.6点から29.8点へと約7点上昇していた。また、グラフの山が高得点側にシフトし、低得点者層に見えていた山が解消されていた。この結果から、アカデミックスキルズ入門の講義中に行った、読む・考える・まとめる・書く訓練を行うことが、読解力を向上させうることが分かった。

課題説明の時点で、文章の型を提示した。吉樂、杉﨑が指摘するように、型をあらかじめ提示することは、文章を作成する上で効果的である[5, 6]。小論文のトレーニングをしていない学生であれば、何を書いたら良いかと考える前にどう書いたらいいかで躓いてしまう。型が示されたことで、問いや根拠や主張と言った具体的な中身に意識を向けることが出来る。さらに、問いをたてるための読み方の指南がされている。これらのことで、並べるための必要なパーツ作りに専念できる。型が与えられていることで、どのように並べれば論理的に説明･展開できるかを体験できている点が重要と考える。また、書く内容を考えるため必要なパーツを探す作業の中で事実と意見を分けることを意識したり、抽象と具体の区別も経験している。

知らない語句（特に専門用語）はあらかじめ調べるよう指示されており、語彙に関する不安も軽減されている。さらに、個別に行われるフィードバックは修正点の明確化につながり非常に効果的であった。書くことを繰り返すことで論理的に考えることにもつながってくる[7, 8]。

次に、読解力向上が果たせた理由を全体の講評から考察する。（表３）全体の講評に記載されたコメントを見ると、回が浅い時期は形式的な事項に関するものが多く見られたが、最終回に近づくとより説得力を増すために、より深い議論ができるように、よりよい問いがたてられるようにと内容を深化させるためのコメントへと変化していた。これは、学生の成長に合わせ、次の目標を提示していることになる。このことによって学生たちは言葉の選び方や組み立て方をより細かに扱うよう誘導されていったようである。それが達成されていることが、添削者の好意的なコメントが最終回に多く見られたことからうかがえる。

最初に学生はルーブリック形式で記された評価表の提示を受けている。項目に挙げられているのは、科目担当者および添削者がこれまでの経験から躓きやすい項目として抽出されたものである。従って、学生たちはこの評価表を意識することで、文章を組み立てる際の重要な事項を身につけることが出来ている。

これらの演習を通して、読解力を向上させるために必要な文の構造を正しく理解する力（主語－述語の関係性など）、代名詞が何を指しているかを理解する力、知らなかった言葉の意味と使い方を理解する力、論理的に推論する力などが獲得できたのだと思われる。理系科目の中で書く作業を行わせたり[9]、読解力を高めることと書くことをセットで指導する[10]などの結果報告は、私たちの結論を支持するものと思われる。

全体の講評のコメントの中に、レポートを書く間隔が休み等の理由で空いてしまうと型に従うことが出来なくなる傾向があると記されていた。このことは、短期間に読解力を押し上げることは可能かもしれないが、定着させるには反復することが必要であることを示していると思われる。

参考文献

1　眞砂薫 , 大学教育における学力低下の背景：日米比較 , 近畿大学教養外国語教育センター紀要 , 3, 109-124 (2013)

2　上野輝夫 , 溝端剛 , 有田伸弘　他 , キャリア形成の一環として実施した日本語教育の効果についての考察 , 関西福祉大学研究紀要 , 22, 125-134 (2019)

3　PISA 調査における読解力の定義、特徴等 , https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/1379669.htm　(2020 年 11 月 24 日)

4　平山祐一郎 , 大学生の読書の変化―2006 年調査と 2012 年調査の比較より― 読書科学 , 56, 55-64 (2015)

5　吉樂均 , 非連続型テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める指導 , 教育実践研究 , 22, 45-50 (2012)

6　杉﨑哲子 , 河野勝幸 , 小学校における読解力を高める国語学習の「書く」活動 , 静岡大学教育学部研究報告 , 50, 185-204 (2018)

7　安藤葉子 , 大学で必要とされる「書く力」とは , 文化学園大学・文化学園大学短期大学紀要 , 49, 133-143 (2018)

8　中村昭宏 , ものの見方を広げ、論理的文章を書く力を高める指導 , 教育実践研究 , 26, 25-30 (2016)

9　松浦拓也 , 書く活動を基盤とした科学的な思考力の育成 , 日本教育研究財団研究紀要 , 40, 19-24 (2011)

10　大津悦夫 , 読解力の指導と書く能力について , 立正大学心理学部研究紀要 , 7, 15-27 (2009)

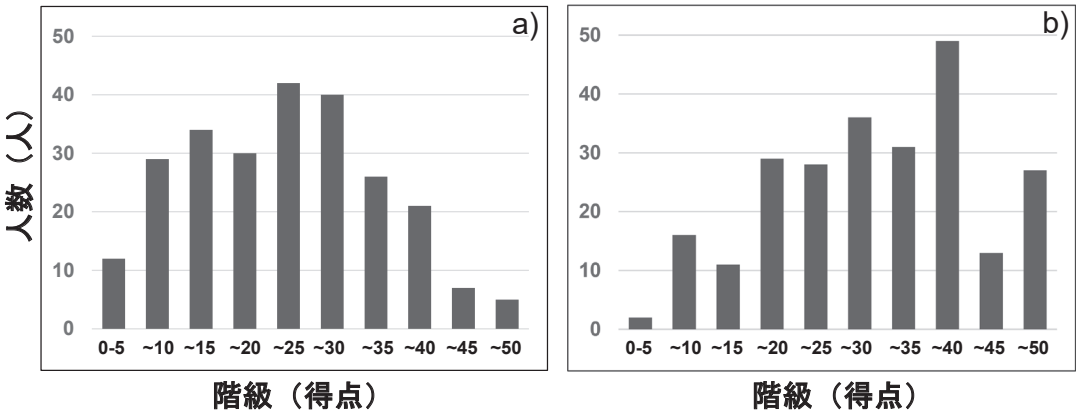

図1　国語（現代文）試験の結果
a) 講義前、b) 講義後

表１　レポートを作成するときに気を付けること

読むとき	まず黙読する
	次に問いをみつけるためにメモを取りながら読む （疑問を持ったところ、議論の余地があるところ　など）
	事実と意見を区別する
	分からない言葉（特に専門用語）は調べておく
書くとき	構成は　問いー主張ー根拠ーまとめ　の型をとる
	問い：背景、問い（気になったこと　など）
	主張：問いに対する自分の意見
	根拠：主張を支える理由、客観的事実など
	まとめ：主張・根拠の再確認、今後の展望
	文体は　だ・である調で統一する
	引用は、間接引用で行う
	一文は短くする
	根拠は、自論・推論では不適切
	文字数は、指定文字数になるべく近づける

表２　ルーブリック評価表

項目		自己診断	評価		
			素晴らしい！（3点）	あと少し！（2点）	要改善！（1点）
表現	文法	□誤字脱字はないか □主語述語の関係は正しいか □助詞は正しく使われているか	ミスゼロ	ミス2個以下	ミス3個以上
	文体	□文末がた・である調か	正しく使われている	―――	誤って使われている
	文章の形式・体裁	□フォーマットに従っているか □段落分けは適切か □接続詞は正しく使われているか	ミスゼロ 問題なし 適切である	ミス2個以下 改善点アリ 改善点アリ	ミス多い 長さが不適切 改善の要アリ
構成	問いの提示	□問いを提示しているか	明示されている	不明瞭	問いがない
	主張の表明	□主張は明確か □立てた問いに対応しているか	明示されている	不明瞭	主張がない
	主張の根拠	□主張を支える根拠は書かれているか □文献は適切に選ばれているか	明示されている	明示されてない	明示されてない
内容	筆者の意見と自身の意見の区別	□あなたの主張と著者の主張を区別して述べているか	区別が明瞭	区別が不明瞭	主張への言及がない
	問いに対応した内容	□的外れな記述をしていないか	適切	やや不適切	不適切

表３　講評で示されたこと

初回	誤字・脱字をなくす
↑	「問いー主張ー根拠ーまとめ」の型をとる
	一文を長くしすぎない（目安：80〜100字の文は長い）
	長い文章は、適切な接続詞使って2つに分ける
	1つの段落に、1つの主張とその根拠を入れる
	推敲する時間をもつ
	問いのなかに、背景として先行研究を入れてみよう
	根拠は、客観的事実、信頼できる情報を用いよう
	根拠として、芸能人のコメントやtwitter上の記事を安易に選ばないようにしよう
	情報検索して、根拠ふくらませよう
	根拠として、個人の体験やエピソードは用いないようにしよう
↓	自分で出した主張に敢えて、反論・疑問を考えてみよう （深い考察ができるようになる）
最終回	読者として、テーマをよく知らない同級生を想定して書いてみよう